卒業論文

身体を通じた性関係が特権化されることに対する批判的論考

――「性＝身体関係イデオロギー」概念による問題提起――

2014 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月　提出

要約

本論文は、現代におけるセクシュアリティの編成秩序において、他者身体を介した性関係が特権化されていることを批判的に検討するための予備的考察である。第1章では先行研究をもとにして、セクシュアリティの編成秩序についての概念図を描き出し、他者身体を介した性関係を批判する必要性を考察する。第2章では前章の議論を応用し、この概念図を通して2000年代以降のオタク言説を見直すことで、そこからセクシュアリティに関する議論を抽出する。

はじめに、これまで提起されてきたセクシュアリティの編成秩序に関する理論的な研究を概観する。そこからゲイル・ルービンが提起したセックスに関する6つのイデオロギー体系を軸としつつ、(1) ジェンダーとセクシュアリティを分析上区別すべきである、(2) 性差別と異性愛中心主義はそれぞれ相互に関連している、(3) 現代ではセクシュアリティにおいて親密性が強調されている、というセクシュアリティの編成秩序を整理する。

こうした先行研究のなかでは、たとえばフェティッシュやBDSM、ペドファイル、売買春などのような、「男／女」二元論ではない区分によって分節化されるセクシュアリティを充分適切に位置づけきれていなかった。しかし従来議論されてきた同性愛の排除は、こうした「性別二元論に依らないセクシュアリティ」を「男／女」二元論よりも従属的な位置に置くことによって可能となっている。それゆえ、同性愛の「排除」(Foreclosure) に論理的に先行する「囲い込み」(Enclosure) を措定することにより、「性別二元論に依らないセクシュアリティ」を位置づけることができるようになる。こうして得られた概念図を「性＝身体関係イデオロギー」と呼ぶことにする。

「性＝身体関係イデオロギー」というフィルターを経ることによって、セクシュアリティに関する新たな視点が得られる。そこから開かれる議論の一例として、第2章では2000年代のオタク言説からセクシュアリティの編成秩序に対する批判を読み取る。まず本田透によるエッセイやライフイベントの考察を通じて、「性＝身体関係イデオロギー」が、具体的には「愛をめぐる二重の疎外」という形で表出することを明らかにする。そして本田はまさに「二重の疎外」を体現した「極限値」であり、そのことが「性＝身体関係イデオロギー」批判を可能としたと考えられる。

次に、本田の主張から「性=身体関係イデオロギー」に対するアンビバレントな「抵抗」を読み取る。本田は家族愛を理想的なものとして強調しており、その主張にはバックラッシ

ュ的な側面も見られる。しかし他方で本田は決して性愛を自明視してはおらず、だからこそ「性=身体関係イデオロギー」に対する批判が表明された。ただし本田の主張は諧謔的であり、本田自身がすべてをベタに主張していたとは考えられない。それでも、(1)「現実での性行為」を自明視しないこと、(2) 性愛関係を特権化しないことによって、他者身体を介した性関係への批判が可能になると言える。

さらに本田のような「抵抗」が現在ではどこに見いだされるかを検討した。社会におけるオタク観の変化によって、本田のような「抵抗」はオタク言説からは姿を消した。しかし現在では、こうした「抵抗」がマンガ表現論に見いだされている。そして本田の提起した「抵抗」は近年議論される腐女子による「抵抗」とは異なるものである。いずれの「抵抗」も一長一短だが、セクシュアリティに関する問題を考える上ではどちらも必要と考えられる。

目次

1　「性＝身体関係イデオロギー」概念の提起 1
1.1　はじめに 1
1.2　先行研究 1
1.2.1　フーコーの「セクシュアリティの装置」
1.2.2　セクシュアリティの序列化
1.2.3　ジェンダー・トラブルと性的アイデンティティの非本質性
1.2.4　「正しいセクシュアリティ」と〔ヘテロ〕セクシズム
1.2.5　ジェンダー／セクシュアリティ・システム
1.2.6　バイセクシュアリティの「忘却／取り込み」
1.2.7　セクシュアリティと「愛」の結びつき
1.2.8　無性愛研究における「強制的性愛（Compulsory Sexuality）」批判
1.3　「性＝身体関係イデオロギー」 11
1.3.1　先行研究の統合
1.3.2　「性＝身体関係イデオロギー」の定義
1.4　「性＝身体関係イデオロギー」によって新たに見えてくる問題 16
1.4.1　イデオロギー装置としての「性欲」概念
1.4.2　「男らしさ／女らしさ」規範の強化・再生産
1.4.3　「性＝身体関係イデオロギー」論から見た「非モテ」
1.4.4　ペドファイルからラディカルな問いを読み取る
1.4.5　他の領域との接合可能性
2　「性＝身体関係イデオロギー」の表出およびその破れ目 24
2.1　20 世紀後半における「愛をめぐる二重の疎外」 24
2.1.1　本田透の少年期――恋愛結婚の過渡期
2.1.2　「ひきこもり」と社会規範の内面化
2.1.3　本田透の青年期――恋愛／結婚の分離
2.1.4　結婚様式の変化と「愛をめぐる二重の疎外」
2.2　性の価値相対化／性の格差拡大――本田透のアイロニカルな「抵抗」 31
2.2.1　本田の主張の要約

2.2.2　アンビバレントに表出する「抵抗」
2.3　抵抗として／保守としてのオタク――本田透以後 35
2.3.1　「オタク・ノーマライゼーション」と「革命」の崩壊
2.3.2　「セクシュアリティ」の後景化と「性＝身体関係イデオロギー」
2.3.3　「保守的」なオタク男性と腐女子による「抵抗」
2.4　マンガ表現論に現れる本田透的「抵抗」 39
3　結論 42
3.1　「性=身体関係イデオロギー」という概念図 42
3.2　潜在する複数の「抵抗」 42
3.3　本論文の限界 44
3.4　性でつながる社会に抗して 44
[注] 46
[文献] 49